

## Nara women's University Digital Information Repository

Title	性の多様性と小学校保健教科書
Author(s)	功刀, 俊雄
Citation	功刀俊雄：教育システム研究（奈良女子大学教育システム研究開発センター），第13号，「本学の教員養成課程の改善・高度化に向けた大学教員と附属教員の連携研究推進事業」成果論文集，pp.193-201
Issue Date	2018-03
Description	
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/4688">http://hdl.handle.net/10935/4688</a>
Textversion	publisher

This document is downloaded at: 2018-07-14T13:26:23Z

# 性の多様性と小学校保健教科書

## — 現状と展望 —

功刀 俊雄（奈良女子大学研究院人文科学系）

### はじめに

文部科学省は2015年4月に各都道府県教育委員会等に対して初等中等教育局児童生徒課長名で「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」を通知し、その1年後の2016年4月には周知資料「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）」を公表した<sup>1)</sup>。後者の資料名に「性的指向・性自認」と明示されているように、また、前者の通知事項の第2が「性同一性障害に係る児童生徒や「性的マイノリティ」とされる児童生徒に対する相談体制等の充実」とされているように、現在文部科学省が初等中等教育機関の教職員に対して理解ときめ細かな対応を要請しているのは、性同一性障害だけでなく同性愛や両性愛などを含むより広い多様なセクシュアリティをもつ児童生徒についてである。言い換えれば、性の多様性についての理解とそれに基づいた対応が求められているのである。

ところで、いわゆる「性的マイノリティ」の人々が学校で遭遇する困難には、トイレや更衣室といった物理的環境に関わる事柄や教職員及び他の児童生徒からのいじめやからかいといった差別的言動などの他に教育内容や教材に関する事柄も含まれている。例えば、「性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会」が2015年に作成した「性的指向および性自認を理由とするわたしたちが社会で直面する困難のリスト（第2版）<sup>2)</sup>」には、「子ども・教育」に関わる項目の一つとして「学校で使う教科書に性的指向や性自認に対する配慮がなく、自尊感情が深く傷ついた」が挙げられている。性の多様性に関して理解ときめ細かな対応が求められながら、教科書はそれに対応できていないのである。

そこで本稿では、小学校教員養成課程の教科に関する科目「体育」を担当する立場から体育科の教材研究の一環として保健の教科書を取りあげ、性の多様性の観点から現在の教科書記述の問題点を指摘し、それが今後どのように改められていくか、国際的な動向も含めて今後の展望について考察してみよう。

### 1. 現行の教科書記述の問題

性の多様性の観点から問題となるのは小学校学習指導要領体育編<sup>3)</sup>によって4年生で学習することとされている「体の発育・発達」に関する記述である。表1は2017年現在使用されている3・4年生用の教科書の一覧である。学習指導要領の「体の発育・発達」の項目には小学校学習指導要領解説体育編では「育ちゆく体とわたし」の見出し（項目名）が当てられている。いずれの教科書も「体の発育・発達」に関する章の題目として「育ちゆく体とわたし」を採用しており、学習指導要領解説に従ったものと思われる。表1にはそれぞれの教科書の「育ちゆく体とわたし」の構成も示した。性の多様性の観点から主に問題となるのは、最初の節と最後の節を除いた、4節構成の場合の第2節と第3節、3節構成の場合の第2節で、思春期のからだと心の変化に関す

る記述である。

表1 現行の小学校3・4年用保健教科書と「育ちゆく体とわたし」の構成

記号番号	教科書名	発行所	「育ちゆく体とわたし」の構成
保健 331	新編 新しいほけん 3・4	東京書籍	1. 大きくなってきたわたし (16-19 頁) 2. 思春期にあらわれる変化-1 (20-21 頁) 3. 思春期にあらわれる変化-2 (22-23 頁) 4. よりよく育つための生活 (24-25 頁)
保健 332	新版 たのしいほけん 3・4 年	大日本図書	1. 大きくなってきたわたし (18-19 頁) 2. おとなの体になるじゅんぴ (1) (20-21 頁) 3. おとなの体になるじゅんぴ (2) (22-25 頁) 4. よりよく成長するための生活 (26-27 頁)
保健 333	わたしたちのほけん 3・4 年	文教社	1. 体の発育 (13-15 頁) 2. 思春期の体の変化 (16-19 頁) 3. 思春期の心の変化 (20-21 頁) 4. 体のよりよい発育 (22-24 頁)
保健 334	新版 小学ほけん 3・4 年	光文書院	1. 変化していく体 (16-19 頁) 2. 思春期の体の変化 (20-25 頁) 3. よりよく体を発育させるには? (26-29 頁)
保健 335	新 みんなのほけん 3・4 年	学 研	1. 変化してきたわたしの体 (18-21 頁) 2. 大人に近づく体 (22-23 頁) 3. 体の中で起こる変化 (24-27 頁) 4. すくすく育て わたしの体 (28-31 頁)

いずれの教科書も、思春期のからだと心の変化に関して、最初に男子はがっしりとした体つきになり、女子は丸みのある体つきになるといった男女の体つきの変化について記載している。ついで「体の中の変化」あるいは「体のはたらきの変化」として初経や精通をとりあげ、その後「心の変化」として異性への関心が高まることが述べられている。身長などの発育について記している最初の節も含めて、これらの記述に際しては個人差があることが強調されている。性の多様性の観点からはこの個人差がどのように説明されているかが重要である。表2はそれぞれの教科書から思春期のからだと心の変化の個人差に関する記述を抜き出したものである。ただし、心の変化すなわち異性への関心についてはこれまでも批判のあるところであり、その記述の主要部分を引用している。

最大の問題点は表中で筆者が下線を引いた、いずれの教科書でも用いられている「だれにでも起こる」という記述であろう。からだの変化に関してはインターセックス（性分化疾患）の人々の中には第二性徴が生じない人がいるし、心の変化に関しては異性への関心が生じない同性愛や無性愛（アセクシュアル）の人々がいる。これらの人々は「だれにでも起こる」という記述によって世界に存在しないことにされてしまっている。同様に「自然な変化」や「あたりまえのこと」も異性愛者以外の人々を排除する表現である。また性別違和（性同一性障害）の人々にとっては自分の望まない身体に変わっていく第二性徴は思春期の最大の悩みごとの一つである。教科書の個人差は主に第二性徴の始まりが早いか遅いかであって文脈が異なるが、そのことに悩んだり心配したりする必要はないという記述（表中で波線を引いた箇所）は性別違和の人々への配慮が欠けていると言わざるをえない。

表2 現行の小学校保健教科書における思春期のからだと心の変化の個人差に関する記述

No.	体つきの変化	体の中（体のはたらき）の変化	心の変化（異性への関心）
保健 331	これらの変化の仕方や、あらわれる時期には、個人差があります。(21 頁)	※初経や精通が始まる時期には個人差があって、中学3年生より後に経験する人もいるんだね。(22 頁)	思春期には心にも変化があらわれ、異性のことが気になったり、仲よくしたいという気持ちが高まったりします。この心の変化はだれにでも起こりますが、変化の仕方や、あらわれる時期には、個人差があります。(23 頁)
保健 332	こうした体つきの変化や、変化があらわれる時期は、一人ひとりちがいます。 ※成長や体つきの変化が起こる時期は一人ひとりちがいで、そのことを「個人差」といいます。(21 頁)	体の中の変化は、一人ひとりちがいますが、 <u>だれにでも起こります</u> 。 ※初経や精通の起こる時期や起こり方は一人ひとりちがうので、早いから、おそいからといって、 <u>心配することはありません</u> 。(24 頁)	男子からは女子のことを、女子からは男子のことを「異性」といいます。思春期になると異性のことが気になったり、なかよくしたいという気持ちが強くなったりします。その一方で、反発し合うこともあります。体が変化するだけでなく、心にも変化が起きています。 ※思春期には、自分が男であるとか女であるとかを意しきしたり、異性への関心が高くなったりしてきます。心の変化は一人ひとりちがいますが、 <u>だれにでも起こります</u> 。(25 頁)
保健 333	※体の変化の起こる時期は、人によってちがいがあんだね。(17 頁)	思春期の体に起こる変化の時期は、 <u>人によってちがいます</u> 。早くてもおそくても、 <u>なやんだり心配したりすることはありません</u> 。 ※変化は <u>だれにでも起こること</u> なんだね。(19 頁)	思春期になると、 <u>異性への関心</u> が高まってきます。異性に関心をもつことは、おとなになるための <u>自然な変化</u> です。しかし、その時期やてい度は、 <u>人によってちがいます</u> 。そのことでなやんだり心配したりすることはありません。また、男女が仲よく協力し合うことも大切です。(21 頁)
保健 334	これらの変化は、早くあらわれる人や、おそくあらわれる人、変化があらわれても目立たない人など、 <u>人によってちがいで（個人差）</u> があります。 ※変化は、 <u>だれにでも起こります</u> 。 <u>心配しなくてもだいじょうぶ！</u> (21 頁)	初経や精通が起こるのは、思春期にホルモンのはたらきが急に活発になるからです。早い、おそいのちがいはあっても、 <u>だれにでも起こります</u> 。(23 頁)	思春期になると、男女の <u>性のちがい</u> に気づくようになります。／異性のことが気になったり、異性となかよくしたいという気持ちが高まったりしますが、一方では反発し合うこともあります。／わたしたちは性のちがいをみとめ合い、男女おたがいに助け合って、協力していくことが大切です。 ※異性への気持ちの変化も <u>あたりまえのこと</u> なんだね。(24 頁)
保健 335	体つきに変化の起こる時期や起こり方は、一人一人ちがいます。(22 頁)	体の中の変化や心の変化は、 <u>だれにでも起こること</u> で、大人に近づいているしるしです。その変化の起こる時期や起こり方は、一人一人ちがいます。(25 頁) ◎	思春期になると、異性への関心が高まり、異性のことが気になったり、仲よくしたいという気持ちが強くなったりします。そのため、異性とのかわり方にも変化があらわれ始めます。(25 頁)

※印は本文以外の吹き出しなどの記述である。ゴシックは原文のまま、あるいは赤字による強調箇所。下線は功刀による。

◎：この欄の記述は右の欄の記述の後に続く文章である。

## 2. 新学習指導要領のもとで教科書記述はどのように変わるか

2017年3月に新しい学習指導要領が告示され、現在新しい教科書の編集作業が進行中である。2018年度の検定、2019年度の採択を経て、2020年度から新しい教科書が現場で使われ始める。

新学習指導要領に関しては告示の直前にパブリック・コメントが実施され、新聞<sup>4)</sup>でも報じられたように、「性的マイノリティ」をとりあげるべきとの意見が寄せられた。これに対する文部科学省の回答は、個別に「カウンセリングなどきめ細かな対応が行われるように指導」するが、「体育科・保健体育科で、(中略)いわゆる「性的マイノリティ」について指導内容として扱うことは(中略)難しい<sup>5)</sup>」というものであった。この回答からも推測されるように、新学習指導要領における「体の発育・発達」の知識内容に関する文言は現行の学習指導要領のそれと同一で、変更はいっさい加えられなかった。学習指導要領が変わらないのであれば教科書の記述も変わらないように思われるかもしれない。しかし、その後2017年7月に公表された新しい小学校学習指導要領解説体育編を見ると、わずかではあるが重要な変更が加えられており、これに伴って教科書の記述も変わるものと推測される。

表3は新旧の学習指導要領解説における「体の発育・発達」の知識内容の内の「思春期の体の変化」に関する解説文を比較したものである。学習指導要領と同じように学習指導要領解説もほとんど変わりがないのであるが、1か所だけ、「個人によって早い遅いがあるもののだれにでも起こる」が「個人差があるものの」に変更された。前節で最大の問題点とした「だれにでも起こる」という文言が消え、第二次性徴の始まりが早い遅いか遅いかという個人差の内容に関する限定がなくなった。

表3 小学校学習指導要領解説体育編の「思春期の体の変化」に関する解説文の新旧比較

旧 (2008年6月)	新 (2017年7月)
<p>イ 思春期の体の変化</p> <p>(ア) 思春期には、体つきに変化が起こり、人によって違いがあるものの、男子はがっしりした体つきに、女子は丸みのある体つきになるなど、男女の特徴が現れることを理解できるようにする。</p> <p>(イ) 思春期には、初経、精通、変声、発毛が起こり、また、異性への関心も芽生えることについて理解できるようにする。さらに、これらは、<u>個人によって早い遅いがあるもののだれにでも起こる</u>、大人の体に近づく現象であることを理解できるようにする。</p> <p>なお、指導に当たっては、発達の段階を踏まえること、学校全体で共通理解を図ること、保護者の理解を得ることなどに配慮することが大切である。(57頁)</p>	<p>(イ) 思春期の体の変化</p> <p>㊦ 思春期には、体つきに変化が起こり、人によって違いがあるものの、男子はがっしりした体つきに、女子は丸みのある体つきになるなど、男女の特徴が現れることを理解できるようにする。</p> <p>㊧ 思春期には、初経、精通、変声、発毛が起こり、また、異性への関心も芽生えることについて理解できるようにする。さらに、これらは、<u>個人差があるものの</u>、大人の体に近づく現象であることを理解できるようにする。</p> <p>なお、指導に当たっては、発達の段階を踏まえること、学校全体で共通理解を図ること、保護者の理解を得ることなどに配慮することが大切である。(108頁)</p>

下線は功刀による。

現行のいずれの教科書においても用いられていた「だれにでも起こる」は「育ちゆく体とわたし」と同様に学習指導要領解説に従ったものと考えられる<sup>6)</sup>。今回も学習指導要領解説に従って



教科書が作成されたとするならば、解説文から「だれにでも起こる」がなくなったことに伴って新しい教科書においてもこの記述がなくなるのではないと思われる。さらに個人差に関しても、第二次性徴の始まりの時期に限定されることなく、より広く、思春期のからだと心の変化には一人ひとり違いがあるという趣旨のものに変更される可能性があるだろう。

新しい学習指導要領解説も、人間の性は明確に男女の二つに分けられ、からだの性（身体的特徴）と心の性（性自認）が一致し、恋愛の対象、好きになる性（性的指向）は異性に限るという性別二元論の異性愛主義に基づいている点では従来と変わらないのであるが、解説文における上記の変更は現在文部科学省が取り組んでいる性の多様性への配慮が反映されたものと考えられるように思われる。新しい教科書の編集・執筆にあたっても同様の配慮がなされることが期待されている。

### 3. 国際的な勧告——教育内容としての性の多様性——

ここでは「性的マイノリティ」の人権保障に関する国連やユネスコ等の国際的な取り組みの内、教育、特に教育内容や教材に関する勧告を紹介しながら、今後の改善方向を展望してみたい。

2016年夏までの国連を中心とした「性的マイノリティ」の人権保障に関する動向についてはすでに谷口、山下の両氏によって紹介されている<sup>7)</sup>。まずは、すでに紹介されているものの中から「ジョグジャカルタ原則」と『みんなのための LGBTI 人権宣言』にふれておこう。

「ジョグジャカルタ原則」とは、2006年11月にインドネシアのジョグジャカルタで開催された、国連特別報告者や国連人権委員会委員、国連子どもの人権委員会委員などを含む専門家会議で採択されたもので、「性的指向・性自認に関して国際人権法を適用する際の諸原則」という副題が付けられている。全体で29項の原則があげられているが、16番目の原則が「教育を受ける権利」である。この「教育を受ける権利」は主文と、AからHまでの8項目にわたる各国政府への勧告からなり、その内のD項が教育内容・教材に関わるものである。以下に主文とD項を引用する。

すべての人は、その性的指向および性自認を理由として差別されることなく、またその性的指向および性自認を考慮した教育を受ける権利を有している。

D：（各国は）教育方法、カリキュラムおよび教材がとりわけ多様な性的指向・性自認の理解と尊重の促進に貢献するよう保証すること。それには多様な性的指向・性自認の生徒およびその親や家族の特別なニーズが含まれる<sup>8)</sup>。

『みんなのための LGBTI 人権宣言』は訳本のタイトルで、原題を訳せば「生まれながらにして自由で平等：国際人権法における性的指向・性自認」となる。以下、訳本に従うが、本書（原典）は国連人権高等弁務官事務所が2012年に発行したもので、本文は5章からなる。第4章「性的指向や性別自認を理由とした差別を禁止する」では分野別の課題があげられており、その中に「教育」の項目もある。以下に「教育」の項の冒頭部分を引用する。

学校や社会教育におけるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックスの子どもたちに対する差別は、子どもたちの教育を受ける権利を侵害します。

性的指向や性別表現を理由に学校や教育機関が積極的に子どもたちを差別することもあり、ときには入学拒否や退学に至る場合もあります。LGBT やインターセックスの子どもたちが、クラスメートや教師たちによるいじめの対象になり、暴力や嫌がらせを受ける場合も多くあります。

このような偏見や嫌がらせへの対策としては、学校や教育機関の努力を結集して、カリキュラムや議論のなかに非差別と多様性の原則をとりいれていく必要があります<sup>9)</sup>。

さて、2016 年の年末には新たに二つの文献が発行されている。一つは国連の上記の文献の新版で、『自由かつ平等に生きる：各国がレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックスの人々に対する暴力と差別に関して取り組んでいること』である。副題からも推察されるように、「性的マイノリティ」の人権保障に関する各国の取り組みの現状を報告しながら結章で各国政府に対する勧告を提出している。教育に関する勧告の内、教育内容に関わる部分を訳出しておく。勧告文の最初の部分と最後の一文である。

各国は、性的指向、性自認、性別表現、身体的特徴を理由とした有害なステレオタイプと闘うために自国のナショナル・カリキュラムを見直すべきである。カリキュラムは非差別の原則と統合的な人権教育を尊重しなければならない。

各国は、子ども・青年が性的指向、性自認、性別表現、身体的特徴に関する情報を含んだ、包括的で年齢にふさわしいセクシュアリティ教育を受けることを保証すべきである<sup>10)</sup>。

もう一つはユネスコの『アウト・イン・ジ・オープン：性的指向、性自認、性別表現を理由とした暴力への教育関係機関の対応』である。主題はうまく訳せないが、不可視化されていた問題を周知のこととすべきということを表わしているものと思われる。本文は、第 1 章「序」、第 2 章「学校・大学等における同性愛嫌悪・トランス嫌悪に基づく暴力の現状」、第 3 章「教育関係機関の対応」、第 4 章「勧告」からなる。第 4 章の勧告は 7 項目にわたるが、第 3 項目が「カリキュラムと教材がインクルーシブであることを保証すること」で、具体的に以下の 4 点が勧告されている。勧告の対象は主に教育行政機関であるが、学校や教師も含まれている。なお、下記の数字は原文ではなく筆者による補足である。

- 1) すべての生徒に対して、性的指向、性自認、性別表現に関する否定的でない正確な情報を受け取る機会を提供すること。
- 2) 低年齢で始まる教育制度の全階梯のカリキュラムに差別に関する教育とすべての人を尊重する教育を含めること。
- 3) カリキュラムと教材が文章や図での表現も含めて性的指向、性自認、性別表現に関して証拠に基づいたものであり、インクルーシブなものであることを保証すること。カリキュラムや教材における不正確でスティグマを与えるような内容は除去ないしは避けること。カリキュラムや教材の中で性の多様性に言及することが困難な場合でも、男らしさや女らしさの意味や、性役割やジェンダーに関わるステレオタイプといった問題を提示することができるし、これらが個人と社会にいかにより有害であるかを示すことができる。

- 4) 年齢にふさわしく、また文化の違いにも配慮しながら、例えば、シチズンシップ・人権・公民教育、歴史・政治教育、言語・文学・芸術教育、健康・身体・セクシュアリティ教育を通じて、生徒たちが性的指向と性自認に関わる諸問題を理解することを助けるためにカリキュラムに導入する適切な内容を確定し、それを用いること<sup>11)</sup>。

以上のように、近年の国連やユネスコは「性的マイノリティ」の人権保障のためにすべての生徒が学習すべき教育内容として性の多様性を位置づけ、そのことを各国政府に勧告してきた。この取り組みは 2016 年に入って特に強化されたように思われるが、今後も引き続き展開されるものと思われる。前節で見たパブリック・コメントにおける文部科学省の回答とはギャップが大きい、学習指導要領や教科書記述の今後の改善方向を示していると言えるだろう。

## おわりに

本稿ではここまでふれてこなかったが、高等学校の教科書では 2017 年度使用開始の家庭科教科書および 2018 年度使用開始の政治・経済、世界史、倫理、英語の教科書で「性的マイノリティ」をとりあげているものがあるという<sup>12)</sup>。これは性の多様性の観点からみて評価されるべきことなのであるが、後期中等教育段階で初めて性の多様性について学ぶということではよいのかと問うならば決して手放して喜ぶことはできない。本稿の「はじめに」で言及した文部科学省の周知資料作成協力者の一人であり GID（性同一性障害）学会理事長でもある中塚氏によれば、性同一性障害の人々が性別違和感を自覚し始めた時期は 56.6%が小学校入学以前で、13.5%が小学校低学年の時である<sup>13)</sup>。すなわち性同一性障害の人々の約 80%が小学校保健教科書を手にする以前にすでに性別違和感をもっているのである。このことだけを考えてみても初等教育の段階から性の多様性について学べる教科書、あるいは少なくとも「性的マイノリティ」を排除しない教科書が求められているのである。

ユネスコはカリキュラムと教材がインクルーシブであるべきと述べていたが、中塚氏も「性的マイノリティ」の子どもたちの問題をインクルーシブ教育の一環として論じている<sup>14)</sup>。新学習指導要領も 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの開催とも結び付けながらインクルーシブ教育を重視している。2020 年は新学習指導要領に基づく新しい小学校保健教科書が使われ始める年でもあった。その時には新しい教科書がインクルーシブの方向でどれだけ修正されたのか、改めて報告する予定である。

## 注

- 1) 通知および周知資料は文部科学省のウェブサイトの「人権教育」→「各人権課題に関する参考資料集」→「「その他」に関する参考資料」のページで閲覧できる。

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/jinken/sankosiryo/1322256.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinken/sankosiryo/1322256.htm) なお、そこには法務省のウェブサイトへのリンクがはられていて、そのページのタイトルは「性の多様性について考える」となっている。[http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04\\_00126.html](http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00126.html)

「性的マイノリティ」に関する文部科学省の動向については、渡辺大輔「性同一性障害」「性的マイノ



リティ」に関する文科省通知の意義と課題』『人間と教育』第 88 号、2015 年 12 月、90－97 頁、同「「性の多様性」教育の方法と課題」三成美保編『教育と LGBTI をつなぐ——学校・大学の現場から考える』青弓社、2017 年、145－166 頁、などを参照のこと。

2) [http://lgbtetc.jp/pdf/list\\_20150830.pdf](http://lgbtetc.jp/pdf/list_20150830.pdf) その他に教科書記述の問題を指摘したものに、小宮明彦「「隠れたカリキュラム」とセクシュアリティ——構造的暴力／差別としての異性愛主義的学校文化——」加藤慶・渡辺大輔編『セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援 増補版』開成出版、2012 年、87－102 頁、渡辺大輔「学校における同性愛者の「消され方」「現れ方」」同上書、103－108 頁、遠藤まめた「教科書から変えていきませんか?」『体育科教育』第 64 巻第 8 号、2016 年 8 月、9 頁、などがある。

3) 『朝日新聞』2017 年 3 月 10 日付朝刊および 3 月 31 日付朝刊。

4) 学習指導要領および学習指導要領解説については新旧いずれも文部科学省のウェブサイトで容易に閲覧できるので、本稿では注記を省略する。

5) 「学校教育法施行規則の一部を改正する省令案並びに幼稚園教育要領案、小学校学習指導要領案及び中学校学習指導要領案に対する意見公募手続き（パブリックコメント）に寄せられた御意見等について」（2017 年 3 月 31 日）[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1383995.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383995.htm) 寄せられた意見は「性的マイノリティについて規定し、保健体育科などの「異性への関心」を削除すべき」とされており、これに対する回答の全文は以下のとおりである。「新学習指導要領においては、総則において、新たに児童生徒の発達を支える指導に関する項目を設け、「個々の児童（生徒）の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリング」などについて規定しています。／御指摘については、文部科学省として、平成 27 年 4 月 30 日に「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」（通知）を発出しており、学習指導要領の規定や同通知を踏まえ、各学校においてカウンセリングなどきめ細かな対応が行われるように指導してまいります。／なお、体育科、保健体育科においては、個人差はあるものの、心身の発育・発達に伴い、「異性への関心が芽生えること」等は思春期の主な特徴の一つとして必要な指導内容です。また、体育科・保健体育科で、上記通知で言及されているいわゆる「性的マイノリティ」について指導内容として扱うことは、個々の児童生徒の発達の段階に応じた指導、保護者や国民の理解、教員の適切な指導の確保などを考慮すると難しいと考えています。」

6) 現行の小学校学習指導要領解説体育編に「だれにでも起こる」の文言があることは、渡辺大輔「「性の多様性を学ぶ」とはどういうことか」(『高校生活指導』第 202 号、2016 年 9 月、56－63 頁)においてすでに指摘されている。また、出典を学習指導要領としているが、遠藤まめた「文部科学省通知を読み解く LGBT と教育のこれから」(『セクシュアリティ』第 74 号、2016 年 1 月、52－58 頁)も表 3 の左の欄の(イ)項の全文を引用している。

7) 谷口洋幸「セクシュアルマイノリティの人権に関する国連決議」『セクシュアリティ』第 53 号、2011 年 10 月、68－73 頁、同「国連と性的指向・性自認——人権理事会 SOGI 決議の意義」『国連研究』第 16 号、2015 年 6 月、123－140 頁、同「「同性愛」と国際人権」三成美保編『同性愛をめぐる歴史と法——尊厳としてのセクシュアリティ』明石書店、2015 年、148－174 頁、同「セクシュアル・マイノリティへの国際的アプローチ」『月報司法書士』第 533 号、2016 年 7 月、14－23 頁、同「国際人権法における性的指向・性自認の人権」『自由と正義』第 67 巻第 8 号、2016 年 8 月、15－19 頁、山下梓「セクシュアルマイノリティの権利保障をめぐる世界と日本の動き」『こころの科学』第 189 号、2016 年 9 月、14－20 頁、など。

- 8) *The Yogyakarta Principles: Principles on the Application of International Human Rights Law in Relation to Sexual Orientation and Gender Identity*, 2007, p.21.  
[http://www.yogyakartaprinciples.org/wp/wp-content/uploads/2016/08/principles\\_en.pdf](http://www.yogyakartaprinciples.org/wp/wp-content/uploads/2016/08/principles_en.pdf)
- 9) 国連人権高等弁務官事務所（山下梓訳）『みんなのための LGBTI 人権宣言 ひととは生まれながらにして自由で平等』合同出版、2016 年、92 頁。原書は、Office of the United Nations High Commissioner for Human Rights, *Born Free and Equal: Sexual Orientation and Gender Identity in International Human Rights Law*, New York and Geneva, 2012.  
<http://www.ohchr.org/Documents/Publications/BornFreeAndEqualLowRes.pdf>
- 10) Office of the United Nations High Commissioner for Human Rights, *Living Free and Equal: What States Are Doing to Tackle Violence and Discrimination against Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender and Intersex People*, New York and Geneva, 2016, p.130.  
<http://www.ohchr.org/Documents/Publications/LivingFreeAndEqual.pdf>
- 11) UNESCO, *Out in the Open: Education Sector Responses to Violence Based on Sexual Orientation and Gender Identity/Expression*, Paris: 2016, p.125.  
<http://unesdoc.unesco.org/images/0024/002447/244756e.pdf>
- なお、本稿では“Education Sector”を「教育関係機関」と訳しているが、原書の本文では「教育セクターとは多くの組織（国および地方の教育行政機関、教員養成機関、学校、大学等）からなり、広範な人々（カリキュラム作成者、視学官、学校長、教師、養護教員、生徒等）が含まれる。これらの組織は文脈によって変わりうる」（p.57）と説明されている。
- 12) 『朝日新聞』2017 年 4 月 22 日付朝刊。
- 13) 中塚幹也「性別違和感を持つ思春期当事者への支援」『精神科』第 29 巻第 2 号、2016 年 8 月、88－93 頁、同「LGBTI 当事者のケアに向けた学校と医療施設との連携」三成、前掲『教育と LGBTI をつなぐ』75－106 頁。
- 14) 中塚幹也「子どもの LGBT の問題からインクルーシブ教育を考える」『授業づくりネットワーク』第 21 号（通巻 329 号）、2016 年 4 月、52－55 頁。

（2017 年 9 月 28 日脱稿）

## 【付記】

本稿脱稿後、日本学術会議法学委員会社会と教育における LGBTI の権利保障分科会の提言「性的マイノリティの権利保障をめざして——婚姻・教育・労働を中心に——」が 2017 年 9 月 29 日付で公表された。そこでも「教科書の改訂及び学習指導要領の今後の見直し」が課題とされ（15 頁）、「文部科学省及び各教育機関・教科書出版社は「性の多様性」に関する教育を小学校低学年から盛り込み、異性愛中心主義を押しつけないように教育内容や教科書の改訂に取り組むこと」が提言されている（20 頁）。<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t251-4.pdf>